

新人発表優秀者



大塚 福長
(神奈川県)



佐藤 博紀
(東京都)

この度、新人発表症例集優秀者に選んでいただき、誠にありがとうございます。

まさか自分が選ばれるとは思わず、唯々驚いております。これもインプラント臨床研究会の講師の先生方をはじめとした諸先生方に、ご指導頂けたおかげだと存じます。

自分1人ではこの症例は行うことができません。術前矯正を行った矯正専門医、補綴物を製作して下さる技工士。診療を支えてくださる、コデンタルスタッフの方々に感謝しながら、今後も診療に従事していきたいと思っております。

大塚 福長

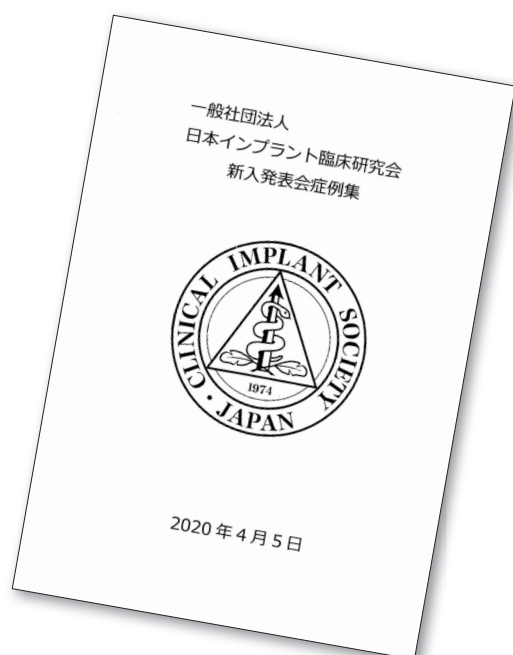
この度は新人発表の優秀者に選出いただき大変光栄です。

講習会では、普段、論文や商業誌等で目にする症例をはるかに超越した、インプラント治療の最前線を走る先生方の症例を学ばせて頂き、かつ、インプラント治療のイロハも教えて頂き、今後のインプラント治療の礎を築く一年となりました。この講習会で得た知識・技術を日々の診療に活かし、患者さんに還元できるように努め、専門医の取得を目標に励みたいと思っております。

この場をお借りし、講習会でご指導頂いた先生方、運営にご尽力いただいた先生方、本会に参加の機会を頂いた新宿西口歯科医院 松成先生に心より感謝申し上げます。

引き続きご指導のほど宜しくお願い致します。

佐藤 博紀



上下顎犬歯の先天欠如にインプラント治療を行った1症例

大塚 福長 (神奈川県勤務)

症例の概要

2016年9月初診、30歳男性。上顎左側乳犬歯の自然脱落と歯列不正の改善を希望し来院。全身的特記事項なし。23・24・33が欠損。55・75が残存し後継永久歯は存在していなかった。55は2度の動揺が認められた。模型上で咬合分析を行い、治療計画を立案。矯正およびインプラント治療に同意を得た。55と18は抜歯し、矯正専門医へ依頼。矯正治療終了後、欠損部へインプラント埋入を行うこととした。

処置内容とその根拠

矯正治療終了後、23・33部に通法に従いインプラント体(OsseoSpeed™ EV 3.6S-9mm)を埋入した。唇舌側に十分な骨量がありGBRは行っていない。免荷期間を経て、インプラント部および22にプロヴィジナルクラウンを装着し、インプラント・天然歯の双方で誘導が得られるように咬合を付与した。咬合・審美性・清掃性に問題がないことを確認した。その後最終補綴を行い、その後良好に経過している。



図1
初診時、感染根管治療終了時、症状再燃時の36デンタルエックス線像



図2
症状再燃時のCT像。36歯根周囲に透過像と近心根の垂直的破折が認められた。

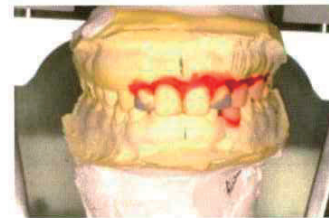


図3
36抜歯後約2カ月の顎堤。陥凹はあるが粘膜面は上皮化している。



図4
抜歯後約2カ月のパノラマエックス線像。

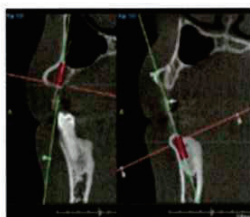


図5
抜歯後約2カ月のCT像。



図6
人工歯中央部にキャピトンを付与した仮床を装着し図5のCT撮影を行った



図7
1次手術直後のCT像。



図8
1次手術後約2カ月の口腔内の状態。

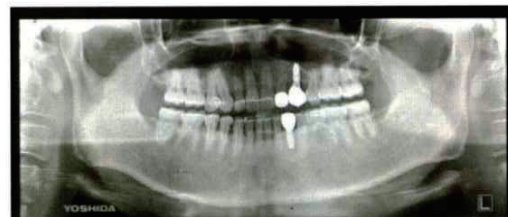


図9
1次手術後約2カ月(左)と約4か月(右)のデンタルエックス線像。

下顎大臼歯部遊離端欠損にインプラント治療を行った 1 症例

佐藤 博紀 (東京都勤務)

症例の概要

患者は 49 歳、男性。下顎左側第二大臼歯の歯内歯周病変のため抜歯適応となり、インプラントで咬合機能回復を試みた。抜歯時にリッジプリザーベーションを行い、半年後にインプラント埋入 (SP Roxolid® SLActive® φ 4.8mm RN 12mm, Straumann, Switzerland) を行った。現在、インプラント補綴後半年経過しているが、良好な経過が得られている。

処置内容とその根拠

インプラントの清掃性のために、付着歯肉の重要性がコンセンサスを得るようになってきた。また、ブラークコントロールでは、隣在歯との歯頸部の段差が障害となりうる。本症例では、顕著な歯槽骨吸収を認める左側下顎第二大臼歯の抜歯時に、リッジプリザーベーションを行い、結果として付着歯肉と清掃性の高い顎堤形態を温存できた。インプラント体はデンタルフロスを行いやすいカントゥアを考慮し RN を選択した。



図 1
初診時の口腔内写真。下顎左側第二大臼歯(37)頰側に瘻孔を認める。



図 2
初診時のパノラマ X 線写真。37 は根尖に到達する透過像に囲まれている。

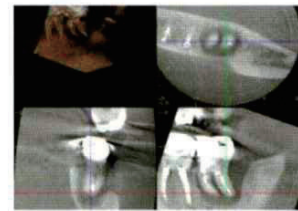


図 3
抜歯前の CT 画像。頰側の歯槽骨が根尖付近まで失われている。

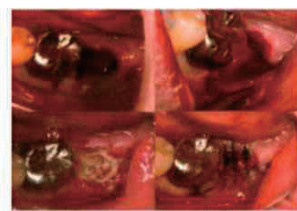


図 4
Bio-Oss® とテルプラグ® を用いたリッジプリザーベーション。

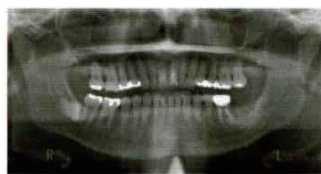


図 5
抜歯半年後のパノラマ X 線写真。



図 6
抜歯半年後の 37 口腔内写真。付着歯肉が維持されている。

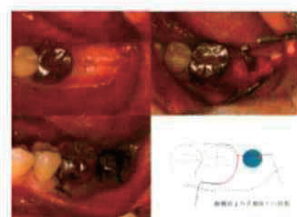


図 7
頰側の付着歯肉幅を維持するため、舌側寄りに歯槽頂切開を行った。



図 8
術後半年のパノラマ X 線写真。インプラント周囲に透過像は認められない。

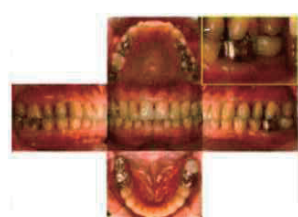


図 9
術後半年の口腔内写真。付着歯肉と清掃性の高い顎堤形態を温存できた。